

書評 長井伸仁『近代パリの社会と政治——都市の日常を探る』

長野 壮一

はしがき

本書の表紙には、19世紀後半パリ都心、ランビュト街の日常を切り取った印象的な写真が掲げられている。歩行者、辻馬車、荷馬車が行き交い、往時の喧騒を偲ぼせる一枚だ。画面右手のサン＝トゥスタシュ教会に相対する形で左手に写り込んでいるのは、当時竣工したばかりのパリ中央市場である。建築家バルタールの手掛けたこの鋳鉄製ホールは、エミル・ゾラの代表作『パリの胃袋』の舞台としても知られている。この作品に通底する民衆の生活圏とそれに浸透する公権力という対概念は、本書を構成する主題でもあり、それぞれ表題の「社会」と「政治」に対応する。両者はそれぞれ「人びとの日常生活を紐帯と文化の両面から明らかにすること」、「行政や政治を、人びとの日常生活との関連のなかで明らかにすること」として本文中で定義されている（7頁）。

この問題系にとどまらず、本書には複数の対概念が輻輳していることに気付かされる。以下では三つの切り口から本書を読み解いてゆくことで、ささやかな寸評としたい。

1. 「ハード・アカデミズム」と「日本の西洋史学」

まずは近年の日本における学術動向から本書を読み解くならば、前提として「ハード・アカデミズム」および「日本の西洋史学」という二つの問題意識が投影されているだろう。

概ね前世紀末より、欧米に留学し現地で学位論文を執筆する機会が西洋史研究者の間で徐々に一般化した。日本語で既発表の業績を欧米語訳して現地の学界に成果を問うたり、日本人が欧米語で公表した業績が国際的に定評ある地位を得る機会は、今や珍しいことではなくなりつつある¹。

これは、著者が学位論文を公刊した当時とは隔世の感がある。1997年、パリ第1大学に論文を提出した著者は、今日の学術状況の先駆けとなった一人である。ソルボンヌ大学出版会より刊行された博士論文は地方自治体研究博士論文賞を授与され、本書第7章の原型となった²。著者の証言によれば、当初は博士論文をそのまま日本語訳して発表することは考えられなかったため、留学から帰国後に研究テーマを変更したという。それを思うならば、この四半世紀における学術状況の変化の大きさを実感せずにはいられない。

著者が学問形成した1990年代、イエール大学において最優秀中世史博士論文賞を授与された俊英によって『ハード・アカデミズムの時代』が刊行され³、他方で『西洋史学』誌上では「日本の西洋史学」の意義を問う特集が相次いで組まれた⁴。本書は、これらの問題提起に対する、今日の

¹ e.g.: Shunsuke Katsuta, *Rockites, Magistrates and Parliamentarians. Governance and Disturbances in Pre-Famine Rural Munster*, Abingdon, Routledge, 2018; Shigeto Kikuchi, *Herrschaft, Delegation und Kommunikation in der Karolingerzeit. Untersuchungen zu den Missi dominici (751-888)*, 2 vols., coll. « MGH Hilfsmittel », Wiesbaden, Harrassowitz, 2021.

² Nobuhito Nagai, *Les conseillers municipaux de Paris sous la Troisième République, 1871-1914*, Paris, Publications de la Sorbonne, 2002.

³ 高山博『ハード・アカデミズムの時代』講談社、1998年。

⁴ 竹中亨「フォーラム 西洋史学と実証」『西洋史学』191号、1998年、42～49頁。「フォーラム 21世紀の西洋史学」同200号、2000年、46～62頁。関連して、近年の特集では次のものがある。南川高志編「フォーラム 古代史研究から見た西洋史学の将来」同240号、2010年、70～81頁。「特集 他者としての『西洋史学』」同260

研究水準を踏まえた明快な解答である。すなわち、業績発表に際する日本語と欧米語の区別は本質ではなく、「専門的批判に耐えうる分析水準と、国際的次元で知的関心を共有できる論述内容とを合わせもつ作品⁵」であれば発表言語は問わないとする視座である。実際、本書が初出となる実証研究（第4、8章）は仏訳すれば現地学界で高く評価されよう。そうした意味で、本書は後続世代に手本を示し得る業績である。

今日における「日本の西洋史学」という問題に関して付言すれば、本書がパンデミック下、国内で執筆されたという事実も意義を持つだろう。現地文書館における史料調査が困難な中、多くの研究者が調査手段の変更を余儀なくされ、研究対象との距離を改めて意識される状況に置かれた。本書でも電子公開史料が随所で活用されている。そうした意味においても、本書は時代性が刻印された研究である。実証研究と史料論・方法論を総合的に配置する章構成も、そうした環境と無縁ではないだろう。

結果として、本書は「外国史研究としての都市史に求められている」もの（36頁）として「できるだけパリ全体を見渡せる位置に立つ」（7頁）ことに成功した。「外国史研究」の強みが活かされた、「日本の西洋史学」の可能性を示す業績である。

2. エルネスト・ラブルスとジャン・メトロン

他方、本書をフランスの学術動向に位置付けたとき、そこにはエルネスト・ラブルスとジャン・メトロンというソルボンヌの二人の巨頭が影を落としていることに気付かされる。

著者はエルネスト・ラブルスの孫弟子に当たる。著者の学位論文の指導教官であったアラン・コルバンは、ラブルスの下で学位論文を取得した。コルバンの学位論文は題して「19世紀リムザンにおけるアルカイズムとモデルニテ」といい、基本的には当時主流であった「系列史学」の枠組みで準備されたものである⁶。コルバンはその後パリ第1大学に教職を得、19世紀史研究センター（CRHXIX）が組織する悉皆調査の主導者となった。著者の学位論文もこのような数量的手法の色彩を色濃く残し、わけても本書第7章——およびその理論編である第6章——はプロソポグラフィの手法が遺憾なく発揮されている。そうした意味で、本書はアドリーヌ・ドマールやフランソワ・フェレらによるパリを対象とした数量史研究の延長上に位置付けられよう⁷。

それと同時に、序章の研究史整理では、1980年代以降に盛んとなったアニー・フルコーやアラン・フォールといった、同じソルボンヌでも社会史研究センター（CHS）所属の研究者による都市史が意識されている。わけても、フルコーが『赤い郊外ポビニ』で提示してみせたような「総体的な現象としての現代都市」（5頁）の像は、本書と共通する視座によるものである。そうした意味で、本書は同センターの創設者である社会運動史家、ジャン・メトロンの学統に連なる著作でもあると解釈できる。

ただし、これらメトロンの学統が概ね20世紀の郊外における現代的な都市問題を問うたのに対

号、2015年。

⁵ 深沢克己『『あまりに遠し』から西洋史研究の『新人類』まで』『史学雑誌』第124編第1号、2015年、42頁。

⁶ 博士論文の準備におけるコルバンの葛藤と「感性の歴史学」の芽生えについては次の文献を参照。アラン・コルバン（平野千果子訳）『自分史』からみたフランス歴史学の歩み』『思想』836号、1994年、4～17頁。

⁷ Adeline Daumard, *La bourgeoisie parisienne de 1815 à 1848*, Paris, S.E. V.P.E.N., 1963; Adeline Daumard et François Furet, *Structures et relations sociales à Paris. Au milieu du XVIII^e siècle*, Paris, Armand Colin, 1961.

し、本書では19世紀のパリ市域内を対象とされる。本書で論じられる対象は、アンリ・ルフェーヴルやジャック・ドンズロといった社会学者の論じる現代的な都市問題とは異なる。今日、相次ぐ暴動やテロ、貧困や移民といった郊外問題が取り沙汰され、2024年パリ五輪を期してグラン・パリ計画が進行し、メトロが18号線まで開通しようとするさらなる市域拡大の有様からすると、行政や日常性といったような本書の問題意識は一見「時代錯誤」の印象すら与えかねない。とはいえ、こうした現代的な都市問題を著者は在外時に目の当たりにしたはずであり、決してその存在を看過しているわけではない⁸。この事実はいかに解釈され得るだろうか。

3. アルカイズムとモデルニテ

ここで重要になると考えられるのは、著者の留学前の指導教員が川北稔だという事実である。イマニュエル・ウォーラーステインによる『近代世界システム』の紹介者としても知られる川北は、工業化の進展するロンドンの都市生活誌を洒脱な筆致で描いている。川北と同様、著者の関心もヴァルター・ベンヤミンが「19世紀の首都」と称したような都市パリの近代性にある。

ただし、本書における近代都市像は、前節で見た通り、現代的な都市問題とも異なる一種の古風な有様である。学問形成に際してルフェーヴルの学問に触れながらも、それに対してアンビヴァレントな態度を取った著者は、本書の副題を「近代都市の誕生」ないし「近代都市の黎明」とすることには肯んじなかったという。近代を現代とは異質なものと捉え、20世紀初頭ですらそのように眼差される点に本書の慧眼があろう⁹。

そのような視角は、川北と共同で『大都会の誕生¹⁰』を著した喜安朗の仕事をも想起させる。ミシェル・ド・セルトーに拠りながら都市民衆の生活圏や日常的実践に肉迫した喜安による都市社会史の主眼は、都市住民の日常性と共同性に民衆騒擾の舞台背景を見出すことにあった。本書において喜安の業績は、都市の日常性を全体史に、すなわち「政治史にまで積極的に視野を広げた、より包括的な都市史」(36頁)に接続する先駆的な試みとして言及されている。そうであるならば、喜安が都市民衆の中に「ある種の誇り¹¹」として見出したような主体性が、本書第1～2章で活写されるような対象においてはいかに発現しているのか、その歴史像をより説得的に提示してゆくことが「日本の西洋史学」の今後にとって有益となろう¹²。

むすび

ここまで見てきたように、本書は「ハード・アカデミズムと日本の西洋史学」「エルネスト・ラ

⁸ 長井伸仁ほか「歴史研究者と対象社会——近現代フランスを中心に」『クリオ』31号、2017年、10～32頁。

⁹ この論点に関連して、著者の学位論文の審査員の一人であったクリストフ・シャルルも、「モデルニテ」の概念史を20世紀初頭、1930年代までで終えている点は示唆的である。Christophe Charle, *Discordance des temps. Une brève histoire de la modernité*, Paris, Armand Colin, 2011.

¹⁰ 喜安朗・川北稔『大都会の誕生——出来事の歴史像を読む』有斐閣、1986年。

¹¹ 喜安朗『パリの聖月曜日——19世紀都市騒乱の舞台裏』平凡社、1982年、155頁。

¹² この論点に関しては次の文献を参照。拙稿「現代歴史学の出発点——社会運動史における『主体性』と『全体性』」岡本充弘・鹿島徹・長谷川貴彦・渡辺賢一郎編『歴史を射つ——言語論的転回・文化史・パブリックヒストリー・ナショナルヒストリー』御茶の水書房、2015年、376～396頁。

ブルスとジャン・メトロン」「アルカイズムとモデルニテ」といった複数の対概念の輻輳から構成されている。このことは、本書が単一の「大きな物語」に回収されることなく魅力的な近代パリの歴史像を叙述し得ていることの背景にあるだろう¹³。

以上の寸評を踏まえつつ、今一度本書の表紙に立ち返ってみよう。当時最新の建築様式として耳目を集め、1973年に解体されたパリ中央市場は、近代パリのアルカイズムとモデルニテを同時に象徴するエフェメラである。そうした意味で、この図像は、前近代とも現代とも異なる近代パリに特有の社会と政治の有様を描き出した本書の表紙に相応しい一枚だと思われるのである¹⁴。

¹³ 付言すれば、『パリの胃袋』の主題も、小市民の心性や共同性におけるアンビヴァレンスにあった。

¹⁴ 本稿は、2022年7月30日に東京大学西洋史学研究室主催で行われた本書の合評会における報告に基づいている。本稿では史学史的考察を主な検討対象とし、19世紀パリ史に関する実証的側面を詳しく論じるには至らなかったが、後者の論点に関しては別の機会に報告を予定している。